

第二回留学報告書

2015年度 FOS 奨学生 福井真夫

1 英語

「マサオ、今こちらが話してたことわかった?」。わかったような顔をして飛び交う会話に相槌を打っているだけで、その実、何も聞き取れていないことを見透かされるようになった。クラスメイトは英語圏での生活が長い人たちが多く、何を話しているかさっぱり分からないことが多かった。そんな中でも仲良くなった一部のクラスメイトは気にかけて僕向けにわかりやすく解説し直してくれたりした。部屋で映画を見た時には、時折、一時停止してわざわざ僕にストーリーを解説してくれた。「バスは bus なんだよ、マサオの発音は bath になってる」。一番仲の良いクラスメイトは会話中に発音矯正まで挟んでくるようになり、心からありがたかった。

日常会話の英語が最も苦労したが、最初は授業も辛かった。9月当初は、教授が何を言っているのかよくわからず、質問もできなかった。しばらくして耳が慣れてきたので質問するようにしたが、一度では聞き取ってもらえなかった。友人らの助けもあって最近はそれも少しマシになった。

2 多様性

アメリカはとにかく多様性を重視すると話では聞いていた。実際にアメリカの大学院に入ってみて、その意義がわかったような気がする。クラスメイトには4年間、米空軍でパイロットをしていた人や、17歳で大学を卒業した未成年などバックグラウンドは幅広い。そのせいなのか、皆、他人と比較したりせずにマイペースに取り組んでいる印象がある。そうしたリラックスした雰囲気は居心地良く感じた。僕は日本にいた頃、周囲と比べて落ち込むことや焦ることが多かった。そんな僕にとって、「4ヶ月前の自分には考えられない程、この一学期で多くを学んだ!!」と目をキラキラさせながら語る友人はどことなく眩しかった。

3 授業と生活

しばらくの間、手当たり次第にセミナーや授業に顔を出した。直接話を聞くことができるなど夢にも思わなかったような研究者が当たり前のように目の前で喋っている光景に興奮を抑えられなかったからだ。そうした中で最も印象に残ったのは“Economics is not the words that explains math. Economics is the math that explains words”という一年目のマクロ経済学の授業で教授が熱く語った一言だった。「経済学とは何か」と言われると、雲をつかむような言葉しか出てこなかった僕にとって、これ以上ない的確な表現だった。話を聞くだけではと思い、ランチセミナーで発表もしてみた。様々な教授や学生が即座に丁寧なフィードバックを返してくれ、研究環境として恵まれていることを強く感じた。

生活面では、寮に住んでいることも相まってイベントが多い。イベントに行くたびにMITの他分野のPh.D.学生と知り合うことになる。分野外の友達の話聞くのは興味の幅が広がるだけでなく、外の空気に触れてリフレッシュにもなるので、定期的な楽しみになっている。

